

～ぶどうと遺跡の里を見守る鎌倉最後の石碑～

げんこうさんねん あ み だ さんぞんいたび 元弘三年阿弥陀三尊板碑

県指定有形文化財（歴史資料）

市内南東部、大谷地に北面する松沢は、赤湯と高島をつなぐ通称「ぶどうまつたけライン」の基幹集落です。歴史は古く 1 万 5000 年前の縄文時代初めから続いています。縄文の遺跡や古墳があり、鎌倉時代には結構な集落があったものとみられます。

松沢八幡神社の参道入口に大きな石碑が建っています。これが新田義貞ら後醍醐天皇派の武士が鎌倉幕府を滅ぼした元弘 3 年（南朝年号、北朝年号の正慶 2 年、1333 年）の阿弥陀三尊板碑です。

この板碑は、赤湯から高島にかけて分布する凝灰石の大きな一枚岩で造られています。高さ 1.79m、幅は基部で 75.8cm。上にいくにつれて少しずつ狭く、薄くなります。三角の頂部の下に突出している額部には二条の刻線があります。額部下の碑面には梵字の種子（※1）でキリーク（阿弥陀）、サ（観音）、サク（勢至）の阿弥陀三尊仏を葉研（やげん）彫り（※2）して、その下部中央に、「元弘三年
おおみそかみずのとりじゅうがつはつかせしゅけいはく
大歳癸酉十月廿日施主敬白」と刻んでいます。その左右に 4 字ずつ 4 行に分けて「光明
へんじょう じっぽうせかい ねんぶつしゅじょう せつしゅふしや
遍照」「十方世界」「念仏衆生」「摂取不捨」と詩形式の仏教の教えである偈頌を刻んでいます。

この偈頌は、鎌倉時代の仏教説話を書いた「沙石集」にあり、阿弥陀如来の広大な慈悲の光はすべての世界を照らし、念仏する人々は一人も捨てることなく救うという意味です。原典は「観無量
じゅきょうしよ
寿経疏」という経典にあります。

松沢八幡神社は、後の建立で、江戸時代以前は観音堂がありました。屋代郷三十三観音二十六番札所でもあったといえます。境内には観音碑も建っています。

松沢入口の「むじなの御所」にある岩に刻まれた、建武 2（1335）年銘の双式板碑は、建武の中興で功績のあった楠正成に屋代荘が与えられた年です。元弘 3 年板碑と建武 2 年板碑は時代が大き

く変わる鎌倉時代の終わりから南北朝時代の初め頃、南朝と北朝の争乱の時代、当地の武士層を物語る貴重な資料でもあります。

※1＝梵字とは、古代インドの文字のサンスクリット語で、種子は如来や菩薩を像のかわりに刻したもの。

※2＝断面が V 字形になるように彫ること。



▶ 松沢八幡神社の入口に建っている元弘三年阿弥陀三尊板碑

南陽市文化財保護審議委員 佐藤鎮雄
平成 27 年 11 月 1 日号 市報なんよう掲載